

第1回 緑を生かし、 共に生きる



1月13日、世田谷区世田谷で現在建築中の松蔭エコヴィレッジを見ながら、第1回の学習会が行われました。講師はエコロジー住宅市民学校主宰、そして松蔭エコヴィレッジの企画者であるチームネット代表の甲斐徹郎さんです。会場は地主さんがもともと住んでいた築150年という建物で、現在コレクティブハウスとしても使われている松蔭こもんずのパブリックスペースです。参加者は予想をはるかに越える51人で、会場はいっぱいになりました。

まずは簡単な実験から始まりました。鉄でできた牛の置物と座布団の温度の差を、すべての参加者に触ってもらって当てるといふものです。鉄の牛はとても冷たく感じられ、逆に座布団は温かく感じましたが、実は同じ所にずっと置かれていたものなので、温度は同じでした。最近の生活の中では冷房や暖房などすっかり温度管理されていますが、私たちが肌で感じる体感温度と実際の温度はかなり開きがあります。イヌやネコが自然に知っている快適さを、温度管理にまかせきりな私たちはうまく利用できなくなっているのではないのでしょうか。

緑のクーラーを味わう

1本の木があると南側から太陽の光があたります。葉がその光を吸収し、北側には涼しい空気が発生します。その空気をうまく家の中に取り入れると、クーラーを使わずに快適に過ごすことができます。松蔭エコヴィレッジの前に甲斐さんが企画した「経堂の杜」というコーポラティブ住宅では、さらに建物の南側をヘチマなどの「緑のカーテン」を使って水の膜を作って室内の温度上昇を防ぐことによって、夏でもほとんどクーラーを使用せずに生活することができそうです。これは集合住宅だけではなく、一戸建ての住宅でも実行することが可能な方法です。

家の中を快適にするためには、まず外の環境を整えることが大切なのだそうです。そして、1軒だけではなく、それを周囲に広げることによってさらに効果を高めることができるのです。このような工夫は、古くからある集落に見られます。沖縄の備瀬の集落では防風林を家の周りに植えた家々が連なり、遠くから見るとまるで森のようです。この集落は海と畑との間にあり、畑を塩害からも防いでくれています。集団で外の環境を整えることにより、中の生活が快適に保たれ、かつ美しい町並みが続いているのです。

環境共生とは？

現代では建築技術が向上し、周りの環境に左右されずに個々の空間を完結させることができるようになりました。外との関係が完全に断ち切れるような高層マンションも人気があります。暑ければ個人の空間の中だけを快適にすることが可能になったのです。そのことで外の空間が熱せられてもお構いなしです。

集落を作らないと生活することができなかった過去の暮らしを依存型共生とすると、現在の私たちの暮らし方はそれぞれの生活が独立し、コミュニティが分断されてしまった自立型孤立だと考えられます。しかし、これからの時代は、快適に過ごしたいという個人のエゴを達成させるために、それぞれの生活は独立させつつ戦略的に共生する、自立型共生という考え方にシフトしていくことが大切なのです。コミュニティは手段なのです。

私たちは今コーポラティブハウスに住みたいと考えて勉強会をしています。集まって住むことが目的ではなく、何を実現させるためにみんなが集まってすむのか良く考えなければいけないと思いました。

(中原区/広岡 希美)